

七
年
目

三月

ドイツから来ていたアニタが帰国した。これまで韓国、フランス、ドイツの外国人が来たが、このドイツ人ほど愛国心に満ちて、日本に対し文句たらたらの人はいなかった。

まだカタコトしか話せない時から「水がくさい。売っている水は高い。ビールもヨーグルトもおいしくない。りんごはもう食べたくない。ドイツへ帰ってから食べる。タバコは健康に悪いからドイツ人はあまり吸わない。日本人が一番よく吸う」など顔をしかめて言う。

寮生達は「池田の水はおいしいし、りんごも秋になればおいしいのが出るよ」と言っただけで、彼女はがんこに自説をまげないで、それも言いまくるのだから、寮生達は「そんならドイツへ帰ったらいいわ」と言っただけで、相手にしなくなつた。

彼女は京都見物に行つてあちこちまわり、金閣寺へ着いたのが四時半で、四時半閉

門の規則を守られて入れなかったらしい。私が京都の印象を聞いたら、「おもしろくなかった」の返事で、わけを聞けば右のことがあったからで、つまりはそれひとつでおもしろくなかった、となるらしい。それに似たのは、暮からお正月にかけて会社の家へ泊まりに行つて、三日に風邪をひき、改源をもらつてのんだら薬疹が出て、一日早く帰つて来た。そして「お正月はおもしろくなかった」のひとつことであつた。ひとつのことが全体をぶちこわすことがあるにしても、泊めた人はそれ以前に、日本のお正月を楽しませようといろんなことをしてやつたに違いないのに、気の毒な気がする。

この治療代が千九百円で、健康保険がないにしては安いと言つたが、彼女は「高い、高い」とまた顔をしかめて、ドイツへ帰つたらどこから返してもらつたのかで、あつた。

そりゃ日本の物価は高いかもしれない。けれども彼女の月収は手取り二十万円であつた。他の寮生の倍ほどの収入があるのだから見合つていたのではないかしら。

ある時、よその会社を見学することになり、八時半に寮を出たが、九時過ぎに案内してくれる人から「八時半の約束だけれど来ない」と電話がかかつてきた。これは彼女のミスで、帰つた時に私が「八時半の約束ではなかったの？」と聞いたら、はじめ

て気がついて、ひたいをおさえて「まちがっていた」と言うので「一時間も待たせたのだからごめんなさいと言ったら？」とすすめた。しかし「見学に行った会社はよくなかったからいい」と。

洋の東西を問わず若いモンはこんな考え方ができるのか、国民性なのか知らないけれどあきれてしまう。私はわが寮生なら叱るところだけれど、彼女に言つても、がんこに自分の思いを通すに決まっているから、もうひっこんだ。愛国心があるのなら、もつとドイツ人の印象をよくすべきと思うのに矛盾している。

私を感じしたのは、日本語が上手になつたことくらいで、でもその上手な日本語で日本の不満を聞いていると「働けど働けどわが暮らし楽にならず」と思い、楽に暮らせる国はないものかと思つている私がむつとしてしまうのはおかしかった。

結局アニタは七か月余りいて、私をドイツ人ぎらいにして帰つて行つた。

四月

七年目

ささやかな旅の記録。札幌の町を歩き、元寮生の結婚披露宴に出て、三鷹市へ行き一泊、武蔵野をサイクリングし、布地を仕入れ、友人としゃべり、映画を観た。寮を出て帰るまでちょうど四十時間。ふだんはせいぜい三キロメートル以内をうろろするしかない私にとつては驚異的な行動であった。

折角北海道まで行くのだからと思うのに、四、五日どころか二日続きの休暇も許されるかどうかあぶない。幸い二日前に開いた寮会へ、総務氏がビールをご持参になり、ゴキゲンで帰られたので、その前のどさくさまぎれに届けを出してまんまとサインをせしめた。

札幌へは早く着くから、披露宴があるホテルの前の北大植物園へ行こうと思つていた。しかし植物園のホテル側の角に「正門はあちら」と矢印があり、かなりの距離を歩いて正門へたどり着いたら、「冬期休園中。ただし温室は入れます」そして「温室

はあちら」の矢印。温室前へ行けば今度は「本日休み」の札がかかっていた。

戸をけりたかったけれど、はしたないから思いとどまり、しばらく歩いていたら金網ごしにミズバショウが見えたので、それであきらめた。

でもどうしてはじめの所に休園中と書いてなかったのだろう。(温室の休日も)私だって冬は閉園だろうと思ひ、空港で植物園の案内書を立ち読みしたが、どれにも出ていなかった。細かくないところが北海道的なのか、北海道の四月は冬で、日曜は休日というのは常識だから書く必要はないのか。でも私としては拒絶され続けて気分が悪い。(今思い出した、ホテルマンも私が植物園へ行つてくると言ったら「行つてらっしゃい」と言ったのだ)

あとはやけくそで、迷子になってやろうと気の向く方へ足を向けて町の中を歩いた。

花嫁さんは女らしくて別人のようであった。なにしろ、男の子みたいな女の子だったし、考えてみれば、すました顔など一度も見たことはなかったのだ。そしてあんなにみんなの祝福のビールを受ける花嫁も見たことない。介添の人は彼女がひとくち飲むとさつとコップをとりあげて空にして戻している。どうやら下にバケツなんか置いてあるらしい。その頃彼女はようやく以前の見た顔をして私にVサインを送ってきた。

別れしなに彼女が言ったことは「おばさんの結婚式にはきつと行きますからねっ」それに対し私はうっかりと「いつのことやら」と言ってしまった。彼女と話をするとついこんな調子になるのだけれど、はずみにしてもオソロシイことを言ったもんだ。三鷹では下手くそなうぐいすの声で目が覚めた。森は若葉の季節。まだ木漏れ日があるけれど、やがて葉っぱが重なって光はさえぎられるそうだ。自転車でそのへんを駆けまわる。いろんな鳥がいて、上手に鳴くうぐいすもいた。

下北沢の布地屋へ行ったら時間を忘れてしまう。布に囲まれると見境がなくなつて、これはやっぱり不治の病か、中毒症みたいなもの。友人もこれにかかっている。「ちよつとオ、わたし大阪まで帰らないかんのよ、はよ出ようよ」「そやったなア」友人は映画好きで、私はなにも東京で映画を観ることもないと思うけれど、泊めてもらったし、つき合うことにする。私の希望の『風の又三郎』はもうやってなくて、『バベットの晩餐会』を観た。しかし友人は大半眠っていて（なんべんもつついたのに）出てから、あそこはなんでああなったのかと聞く。もう何しに入つたのよ、寝るときよ。

あとは駅の近くで、大阪へ帰れるぎりぎりまでしゃべりこんで、夜中に帰ってきた。月給の半分を二日で使い、この先しばらくはけちけちと暮らすことになる。

追記。帰った翌晩に友人から、買った布の私の分がひとつ彼女の袋に入っていたと電話がかかり、そして自分のはもうブラウスとスカートに縫いあげたとのこと。私はまだゆっくりと眺めてもいない。

五月

七年目

去年、六甲高山植物園へ行つてから、この次はミスバシヨウとエーデルワイスを見なくては、と思つていたのに、行かねばという氣の割に体調が悪く、ようやく十四日に休むことにした。そして、長男を無理やり誘いこんだ。自動車とはよく言つたもので、これで自動的に山上まで運んでもらえる。

こうと決まつたら現金に元氣が出て、ミシンを出し、先月東京で仕入れた布でブラウスとキュロットスカートを縫う。友人が一日で作つたと言つたから、私もまねをして一日で仕上げた。でも雨が三日間しとしと降つて、前の夜も雨の音を聞きながら眠る。また雨女か。

十四日、息子の電話で目を覚まし「お天気は？」と聞けば「いいのじゃない？」という返事。雨粒は落ちてないくらいのことかと思ひながらカーテンをあけたら、なんと雲ひとつない青空が見えた。

しかし寒い。山はもつと寒かろう、とスカートはやめにしてジーパンをひっぱり出し、風よけも着て、それに合わせて運動靴をはいた。カメラはばかチョンとかしいのと、レンズも望遠と接写用を用意し、双眼鏡を持って、格好はすごく勇ましい。

目的のミズバショウは名残りの穂だけ、エーデルワイスは葉っぱを出したところで花の咲くのはまだ先らしく、両方ともはずれたけれど、ミヤマオダマキ、ゲンチアナ、アコーリス（りんどう科）、エゾイヌナズナ、ナツユキソウ（なでしこ科）、ヒメシャクナゲ、クリンソウ、イワカガミ、アツモリソウ（らん科）、センダイハギ、イカリソウ、クロユリなど、コマクサも気の早いのは花をつけていて、言うことなしであった。

しかし、風の中で花を写すのはむづかしい。早めのシャッターに望みを託したが、目の網膜にゆれている花が残っている。この方が確かだろう。

青葉が美しく、ホトトギスが鳴いていて、いつものことながら離れたくなくて困ってしまふ。でもまたそう遠くない将来にエーデルワイスを見に来ることにして山を下りた。息子をこき使ったけれど、はからずも母の日であった。

六月

梅雨に入って頭がはつきりしない日が続いて困る。そんなら梅雨時以外ははつきりしているのかと言われるともひとつ困るけれど、とにかく今はお空のせいということに……

長男に働きたくないとぐちつたら、テレビとビデオカセットを持ちこんできた。これで気を紛らわせろということか、つまりはごまかしの手のようだ。

でもラジオを聴きながらの生活に慣れてしまってるし、テレビは見んならんからめんどくさいのだ。見ていても仕事で中断されるから歓迎できず、まあ部屋の中がちよつと文化的に見えるというところか。

三か月経つと顔つきが変わると言うキャッチフレーズのすみれコーラスに入つてもう五か月。一向に顔つきはよくならず、肺活量もふえていない。それでも喜んで行く。歌うのが好き、もあるけれど、ふだんは味わえない安らかな気持ちになれるからだ。

私の仕事は寮生が帰ってから忙しくなり、トラブルは夜起きるに決まっている。ボイラーが故障しているのが判るのも、モーターが止まって水が出ないのも、もちろん停電も。その度になんとかならないかと配電盤をにらんだり、脳みそをかきまわしている。

先夜は洗濯室の水が止まらなくなつて、ことはパッキンを替える簡単なことだけれど、元栓が屋上にある貯水タンクのそばにあつて、作りつけの垂直のはしごを登らなといと行けない。屋上のそのまた上だからほぼ五階の高さである。夜の闇が幸いして目がまわることもなくすんだけれど緊張は残っていたのか、翌日コーラスへ行つたらほつと気のゆるむのが判つた。

コーラスでは大勢の中に入つて、先生の言われる通りにしておれば間違いなくて、例えば口を大きくあけてと言われると明るい声が出るし、とにかく従つていたらよい結果が出るのでとても楽なのだ。

昔からコーラスが好きだった私は性格的にもソリストではないのだろう。特に夜起きる事を、私一人でなんとかしなければならぬのは荷が重いようだ。心ならずもつっぱって長らくやってきたけれど、コーラスへ行つてそれがよく判つた。

お湯が出なくて、水があふれ、まっ暗になつても「あした、会社の人に頼もう」と

言えるようになればよいがと思っている。

エピソード

同人誌は目標の百号を達成してめでたく終了した。同時に私の日記も終わったけれど、寮母としての生活はまだ続いた。最終回には、もういやになったとぐちっていた私を励まし慰めてくださった同人の皆さんへのお礼と、ちよつとええかつこして、百号にあやかり百折不撓という言葉を自分に与えて終りにする、と書いた。